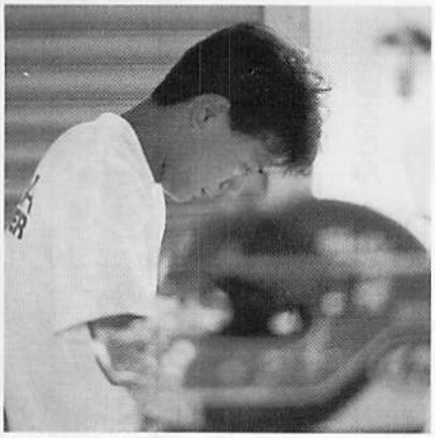
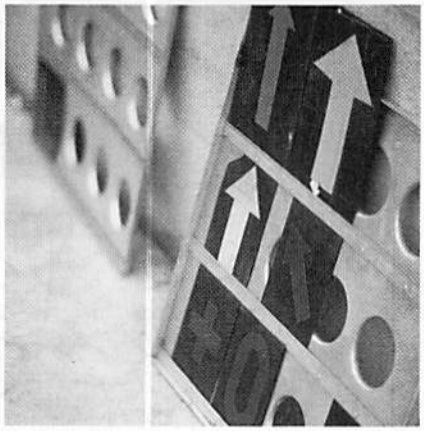
前へ — FJ—1600

DERECTION SHUHEI NISHIZAKI
TEXT BY AKIHIRO KOMIYAMA
PHOTO BY SADAHO NAITOH





水野昇太選手を応援して下さる
スポンサーを募集しています。
（お問い合わせ先）
PEEK-A-BOO RACING
〒604京都市中京区竹屋町東洞院西入三本木5-464-1
Tel（075）255-6202

LAP7 RESTIVE MACHINE

「9番グリッドは水野選手。"勝つしかない"という力強いコメントをくれました。マシンの調子さえ、元に戻れば上位入賞が狙える選手です。」

9月12日、93T－英田サーキット・チャレンジカップレース第4戦。午後5時のFJ1600決勝レーススタート直前、選手紹介のアナウンスがサーキット場一体に響き渡った。

早朝に微笑みを見せていた天候は午後になるにしたがい陰りをみせ、この頃になるとぶ厚い雲が一面の空を覆い、天空から心なしかポツポツと雨の滴が落ちていた。それはまるで今の水野昇太の心を表すかのように・・・

FJ1600の公式予選は予定通り10時35分にスタートされた。ピットから勢い良く飛び出す他のマシンをゆっくりと眺めてから、数台遅れて彼のマシンはコースへ走りだした。

3702m。これがT－サーキット英田のコース距離だ。彼のマシンは1週目1分44秒251、2週目1分43秒328と順調な滑り出し。このまま順調にいけば、前回優勝時の41秒台を叩き出してポールポジションが狙えるはずであった。

だが、3周目に1分43秒052を出してから41秒台どころか、43秒台すらもクリアできない。ラップを重ねてもタイムが一向に伸びないのだ。彼の焦りとは裏腹に、容赦なく予選は終了した。彼の最高タイムはトップとの差が2秒755の1分43秒052。結果的に3周目に出したタイムが最高で、スタートは9番グリッド。これは彼にとって、かなり不本意な成績である。

「ガンバります。今は僕が頑張るしかないんですよ。」

予選終了後、腕組みしたままの彼はこの一言しかいわなかった。今の彼に愚痴は山ほどあるに違いない。それは予想外のクラッシュをしたシーズン中盤以来、たぶんベストなマシン状態でレースに望んだことがないからである。

しかし、メカのことも熟知している彼は、数日前から昼夜を通して走行並びにマシンのチェックをメカニックとともに行っていたので、メカニックが十分に努力しているのは実感している。

彼が余計なことを何も言わないのは、きっと「今のマシンでは、このタイムしか出せない状態がベストなんだからしょうがない。このじゃじゃ馬を乗りこなすしかないんだ」と自分の心に言い聞かせていたからに違いない。

午後5時07分、ポツポツと落ちる雨の滴は強まることもなく、かといって止むこともない。コースのあちらこちらに散らばっていた観客が一斉にメインスタンドに集まった頃、メインレースであるFJのフォーメーションラップは始まった。タイヤを暖めるためマシンを左右に動かす彼は、傷ついた戦友を励ましながら、勝利を信じて戦場へ向かう兵士のようにも見えた。

「僕はフォーミュラーレースが好きなんです。勝つか負けるかで中途半端がないでしょ。そこがいいんです。」

この彼の性格が、ときとして彼自身に非情なレースから逃げることを許さない。

午後5時09分、雨の影響もなくコース状況はドライ。グリッドについた34台のマシンの見つめるスタートシグナルが青に変わる。轟音とともに、すべてのマシンが勝利を求め飛び出す。

決勝レースが始まった。

いつものように彼のマシンは、第1コーナーでいきなり2台を抜き去り、さらにヘアピンで1台を抜き、アグレッシブな走り出しを見せた。完璧な状態でないにもかかわらず、彼のマシンは刺しつ刺されつつ熾烈なトップ集団の最後尾に付けたのである。

ラップを追うごとにトップ集団の順位争いは熾烈さを増し、彼のマシンも負けじと前のマシンとの距離を詰める。まさにFJの醍醐味を感じさせる展開。このままなら彼のドライビングテクニックでさらに上位のマシンをパスしていくはずと、見つめる誰もが感じ始めていた。彼の走りは、周囲にそんな期待を感じさせるほど今のマシンの状態以上のパワーを引き出していた。

だが、そんな彼を嘲笑うかのように、ラップを増す毎に彼のマシンはじゃじゃ馬の本領を発揮し始めていた。なんとマシンの心臓部である水温が異常に上昇したのである。

じゃじゃ馬は主人の言う事をいつまでも大人しく聞いてはいないものだ。「このじゃじゃ馬め」彼はヘルメットの中でつぶやいた。

今後のポイント争いのことを考えれば、ここで無理をしてリタイヤはできない。6ラップに入った頃、彼のマシンはやむなくトップ集団からペースダウンをしていた。

しかし、じゃじゃ馬マシンへ簡単にポイントを許すほどFJはなま優しいレースではない。後の7位に付けていたマシンをパスした良馬らしい黄色のマシンが、すぐにテールトゥノーズで彼のマシンに迫っていた。この良馬とじゃじゃ馬の差は歴然であった。8ラップ、スリップストリームから彼のマシンは、あっさりと抜かれていた。

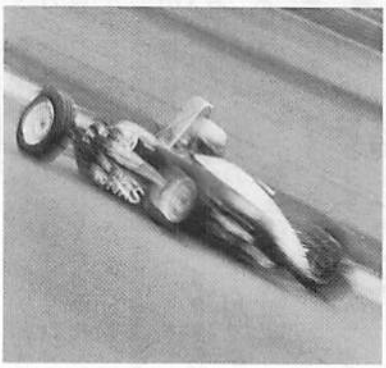
大抵のレーサーは、この時点で気力を失い、レースを諦めてしまうだろう。

スしたのである。そしてラストラップまで、彼は限界の来ているマシンをテクニックで必死に操り、後続のマシンを完全だが、厚い雲間からさす一筋の光を望むように、彼は諦めず必死にじゃじゃ馬に鞭を打ち、食い下がっていた。

そして残り2ラップ。彼のマシンは先ほど抜かれてしまったストレートで、今度は逆に前へ出ていた黄色のマシンをバに押え込んで6番目のチェッカーを受けることができた。

「今日は（つまらないレースを見せて）すみませんでした。次はやりますよ。」彼のレース直後の言葉である。最近のマシンの調子からいえば、ポイントを得たことだけでも自慢ができるはずなのに、彼は余計な事はいわず、こういって頭をさげたのである。

自分の置かれた状況に言い訳をするよりも、じゃじゃ馬を完全に乗りこなせなかったことが悔しかったのだろう。常に上のカテゴリーを見つめ、前を見続けてアグレッシブに走る、レーサーとしての彼の姿がそこにあった。

それがレーサー・水野昇太である。

（つづく）